

FOR ADULT ONLY



ホルンの魔女つかまえた

A WITCH OF HORN WAS CAUGHT

2014  
WINTER  
PRESENTED  
BY  
GREAT  
ACTA





**WITCH TRIAL**

**FOR A DEFENDANT, LIEZA**

**JUDGMENT IS ...**



ホルンの魔女つかまえた

A WITCH OF HORN WAS CAUGHT



んああん  
ふっ♡

あっ♡

くう♡

ありがとうございますっ

んあつく  
あっ♡  
あっ♡  
ええ？この乳も  
一体どれだけ大きくなれば  
気が済むのだ？  
ひんっ  
ご主人様に  
寝ていただいたからあつ

フビ たまらん：  
また一段と  
腰使いが上手くなったのお  
リーザよ  
お前は抱くたびに  
いやらしく  
成長しよるなあ：

もつといっぱいい  
寝てください！  
ご主人様に悦んでもらえる  
体になることが…ん  
私の喜びです♡



ドカ

わしの子を孕めっ  
リーザよ  
い、幾ら出せば  
わしの子を  
産むのだ…？  
ふああ…っ  
そ、それはあ

クヒビツ かわいいのお  
ええのお、  
高い金出してる  
甲斐もあるっでもんだっ  
あはああ♡  
つぶ、深い

ホルンの魔女  
リーザ

……

体で男を誑かし、  
ロマリアに楯突く  
毒婦めが……

キッ

リーザ・フローラ・メルノ  
国際テロリスト、  
アークの一味

ロマリア王国および  
国際平和に対する  
冒涇、破壊行為の罪で  
貴様を逮捕する

……

ろ、  
ロマリア軍！

あっ

よし連行しろ

議長、貴方も  
ご同行願えますか

わ、わしは知らん……

あれは  
ミスロで買った売春婦で、  
素性は知らなかった……

リーザ・フローラ・メルノ

ホルンの魔女と呼ばれる10代の少女

国際的テロ集団、アーク一派の一員とされる

ニールにて、ミスロ市議会議長・レオニドフマンの邸宅で

諜報活動中のところを逮捕

ロマリア法における第一級政治犯罪者として

ロマリア本国へと護送された

リーザは国際治安維持法違反などの罪で起訴され  
ロマリア国軍事裁判を待つ事になる

その運命の日まで、

リーザの永く過酷な

陵辱と拷問の日々の始まりであった

はあ…  
は…  
ふっ

薄暗い石造りの部屋に  
少女の荒い呼吸音が響く  
それと複数人の男の高圧的な声も

いつまで  
白を切るつもりだ？

貴様は各国の政治家や資産家と姦淫を繰り返し  
多額の金を引き出し、シルバーノアへと  
送金していた  
アークのテロ活動の支援の為に

っ…  
う…

シルバーノアと連絡を取る方法は？  
アークは何処にいるんだ？



はあ…

は…

……っ

ん……っふ

ん…

…し  
知りません…

アークと…いう人も知りません…  
私はただの売春婦です…  
せ、生活のために体を…

瞬間ムチの風きり音と  
肉が叩かれる破裂音が響く  
少しの悲鳴も…

とぼけるなよ毒婦が！  
我々が何も知らないと思ってるのか！  
貴様の事など調べ尽くしているんだ

ギョ

ギョ

ギョ

どちゃっ

んいぎっ

グッ





一週間後の裁判で死刑は確定だがアークの事を話せば反省の意志と認められ、情状酌量される可能性もあるのだぞ

…知らないです…

なおも白を切るリーザの体を男はしばらくの間ムチで鞭る  
白い肌のあちこちに赤い線が走り  
血が滴り落ちる

いい加減にしろよ…?  
正義の味方を気取るのもな

アークの何を信じているのかしらんが  
奴はただの犯罪者  
殺人者、テロリストなんだぞ

んあつ  
は…

貴様の汚い体でせこせこ稼いだ金は皆、爆弾になって世界各地にばらまかれ大勢の人間を殺しているのだ

晒された秘部をブーツでぐりぐり踏み潰しながら男は続ける

見る、アークに破壊された  
ミルマーナの油田の写真だ  
テロは成功、ロマリアの拠点を見事潰し、  
貴様らはさぞや喜んだであろうな

だがここで何人の民間人が働いてたと思う?  
こっちは爆弾で吹っ飛ばされた孤児院の跡地だ  
何人の罪のない子供達の焼死体を  
収容したか教えてやろうか?

アークは殺人者だ!

貴様もだ

貴様が金を産んではアークが人を殺すんだ

貴様が処刑されたとして

アークは人を殺し続けるだろうな

貴様はトカゲのしつぽだ

もはや助かる道はない

だが最期に、貴様が殺してきた人間に対して  
罪滅ぼしをすることはできるのだぞ?

アークを逮捕し、怨恨を断ち切ることが…

………  
しりません……

裁判までの一週間

リーザはアークの事を喋ることはなかった

その後も絶え間なく続く

陵辱と拷問に屈することはなかったが、

アークによる破壊の傷跡を見せつけられることが  
何よりリーザの心を深く抉っていた

それはリーザが信じていた正義によって

もたらされた、もうひとつの現実であった

………つ

ガス…

# ロマリア王国軍事裁判

被告人 リーザ・フロラー・メルノ

大理石で裝飾され、一面真っ白な議場  
その中央に、黒衣に身を包んだ魔女の姿がある  
魔女は後ろ手に縛られている  
抵抗の様子もなく毅然として直立していた



リーザは国際治安維持法違反、  
テロ・破壊活動罪および幫助罪、人権侮辱罪  
邪な目的で不特定多数と姦淫した罪、  
妻帯者と姦淫した罪  
など145の罪で起訴された

傍聴席から見守る人々にも明確に聞こえるよう  
リーザの罪が大きな声で読み上げられていく

姦淫に関する罪はことさら強調され、  
男性の人数、回数、行為の内容まで  
事細かに陳述されている

傍聴席からヒソヒソ声が漂ってくる  
後ろ姿のリーザの表情は  
伺い知ることができないが  
体はかすかに震えているようにも見えた

リーザの心を辱め、  
聴衆にこの少女が  
忌むべき魔女であることを  
印象づけた



判決が言い渡される

ロマリア王国民に対し  
1ヶ月間の奉仕刑ののち  
銃殺刑

少女に告げられる死刑判決  
しかもただの死刑ではない  
その内容に聴衆がざわつき始める  
リーザは自らの運命の終わりを  
ただ静かに、無表情に聞き受けている



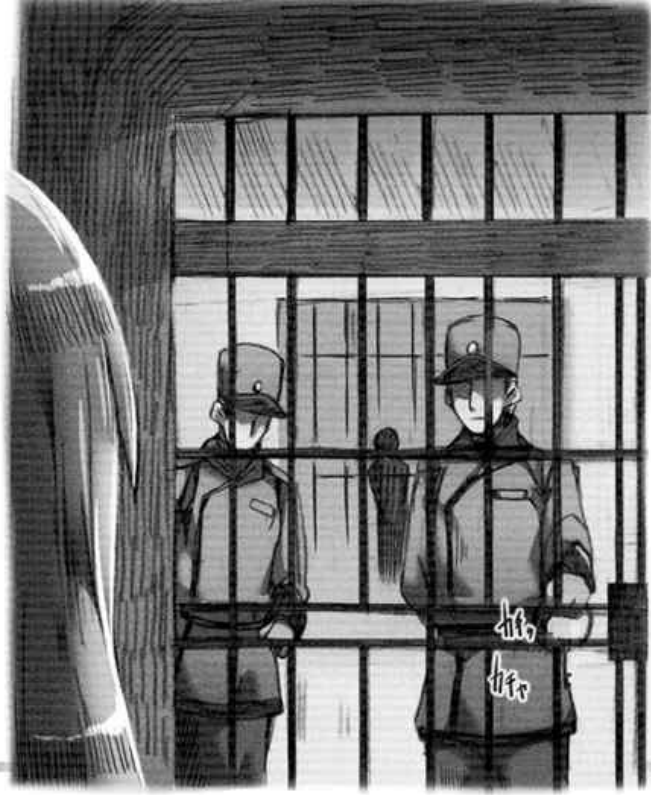
ホルンの魔女つかまえた

A WITCH OF HORN WAS CAUGHT

リーザはロマリア市郊外の  
政治犯罪者収容所―  
日も当たらぬ地下の独房に収監された  
ここで、まずは『1ヶ月の奉仕刑』  
に服することになる

それは  
リーザの人間としての尊厳を蹂躪し  
体も心も徹底的に陵辱し尽くす刑罰であった

朝の時  
リーザが繋がれている牢屋に  
二人の刑務官が迎えに来る  
ここからリーザの一日は始まる



リーザには衣服は与えられず  
一日中、常に裸で過ごしている  
本来魔法使いで、戦闘能力もあるので  
警戒のためにいかなる装備品をも  
身につけさせてはならないという事だが  
大勢の男性と姦淫を働いた魔女への侮蔑と、  
見せしめによるところが大きかった

北国であるロマリアの寒い気候によって、  
立っているだけで苦痛を味わい、  
身をよじるリーザだったが  
それに憐れみを抱き、布を与えてくれる人間など  
ここには一人としていなかった  
死刑を待つ身であるため、  
リーザの体調など基本的に省みられない

牢屋から出され、手枷を付けられるとリーザは  
冷たい石造りの廊下を素足で歩かされる  
他の囚人たちが早朝だというのに起き出してきて  
鉄格子に身を寄せては裸の少女を視姦している  
性器を取り出して自慰を始める囚人も何人かいた  
そのまま二人の刑務官に連れられて  
収容所を後にした

収容所から約500メートル、街中を歩かされ  
郊外のロマリア軍兵舎へとやってきた  
兵舎の中庭に進むと、  
空き地のような開けた空間と  
その中心、地面に立てられた晒し台がある  
ここがリーザの日中の仕事場だ



…っ



リーザは晒し台に固定される  
穴の空いた二枚の板に首と両手首を挟まれ  
地面に二本刺さっている楔と、  
両足首の枷が繋がれた

晒し台と楔の間隔は絶妙で、間のリーザは  
膝を付くことも足を伸ばすことも  
出来ない体勢で縛られる  
数分と立たずに圧迫感で呻き出すリーザ  
刑務官はそれを一瞥すると足早に去っていった



おら朝飯だ!  
へっへ

やがて兵舎から『客』が現れた  
兵士はリーザにひと声かけたあと  
後ろ手に回り、おもむろにズボンを脱ぎ  
リーザの丸出しの秘部を犯し始めた  
前戯も何もない  
肉棒と膣壁が擦れる感覚に  
男は歓楽の声を、  
リーザは悲鳴を上げた

乱暴に腰をしばらく打ち付けたあと、  
膣内に射精  
その後尻の穴を犯し、射精  
リーザの体内に2発精液を放った男は  
台の前に回って、  
肉棒をリーザの口に突っ込み綺麗にした



一人目の奉仕を終え男を見送ったその瞬間、  
再び膣内に挿入感  
固定されたリーザに見ることは出来ないが、  
リーザの後方には既に十数人、  
『順番待ち』の列が出来ていたのだ  
リーザは代わる代わる男たちに使われていった

ガッ.. ザッ

ザッ

ガッ..

へへ…スツキリ  
よし次イ!

オッス!

おふっ出る…

…ん

んっぐ

んぶぶ



正午も過ぎると、リーザの仕事場には  
黒山の人だかりがある  
リーザの体内に精を放った男は  
既に50人を超えた  
股の間の地面には白い大きな水たまりがあり、  
全身は汚れきっていた

しかしまだまだ仕事は終わらない  
この奉仕刑は日没まで続けられるのだ  
一切の自由のきかないリーザに  
次々と肉棒が入りしりしていった



また、この頃になると  
順番待ち、手持ち無沙汰の男たちが  
面白半分でリーザの性器以外を弄び始める  
口の中に泥や雑草を詰められたり、  
頭上から小便のシャワーが降り注ぎ、  
異臭を嫌った男がバケツに水を汲んできて  
リーザの顔面めがけてぶちまけたりした  
しかもその間もリーザの性器や尻は  
使用され続けている

リーザはあらゆる暴虐にただひたすら耐えた

ふー…

ふー…

日没  
午後6時過ぎ

この日は100人以上に犯されたリーザ人だかりは消え、周りには数人、リーザの体で遊びながら談笑している男が居るのみだった

やがて迎えに来た二人の刑務官がその数人を追い払うとあたりは夕暮れの静けさに包まれた



刑務官は晒し台からリーザを開放しその後汲んできた冷水で体を適当に洗った

リーザを立ち上がらせ再び手枷が嵌めると、3人は収容所まで徒歩で帰路に着くリーザの足取りは重く、痛みからかひよこひよここと不自由そうに足を出した



しかし収容所に着いたものの、リーザが牢屋に戻されることはないこれからすぐ『夜の仕事』が待っている



『夜の仕事』とは、刑務官たちによる陵辱だった  
実際は尋問：アークに関する告白を  
強要するためのものだが、  
それは苦悶や激痛を伴う拷問であった  
しかも刑務官たちは  
リーザが告白しようがしまいが、  
拷問自体を楽しんでいるフシがある  
リーザの首に縄が巻かれ  
天井の滑車が回ると  
リーザの体が宙へと吊り上げられる  
完全に吊ってしまうことはなく  
リーザの足先が地面を離れる寸前に  
滑車が止められた



限界まで背を伸ばして  
懸命に呼吸をするリーザ  
少女が必死に生きようとする様子を  
刑務官たちは笑みを浮かべて見つめ、  
尋問に使う器具を見繕い始める  
リーザはこの状態のまま数時間  
鞭打ち、火攻め、凌辱など  
ひたすら拷問を受け続けた





…カハッ  
ハッ

ギョ

…ッあゝゝ…

ビクビク  
ビクビク



奉仕刑

リーザは一日で100人以上に犯され、甚振られた

かつて数え切れない程の男たちと  
肌を重ねてきたリーザ

中には数千人に輪姦された経験もあったが、

この奉仕刑はリーザには耐え難いものであった

それはリーザが『ホルンの魔女』たる所以の  
不思議な力にある

動物を従え、モンスターとも

心を通わすリーザの特殊能力

その根源は、生き物の感情を読み取れる力であった

一種の精神感应能力とも言えるこの力は、  
リーザを抱いてきた男たちへも使われていた

……あ……

リーザが体を売ってきた数々の男たち…  
その全てが、リーザへの

『好感』と『愛情』を持っていた

リーザは抱かれながらその感情に触れることで

リーザ自身も、激しい行為の中でも

性の悦びを見出していた

しかし今、リーザを犯す男たち

その内に渦巻く感情は

『憎悪』『蔑み』『畏怖』…

リーザは膣に肉棒を押し込まれるたびに

その負の感情に触れてしまい、

精液と共に体内へと注入された

ここでのセックスは、今までのものとは

全く別のものであった

リーザは、その力ゆえに体と

何より心をズタズタに陵辱されていた

リーザは涙を流す  
体への責め苦ではなく  
心への重圧に耐えられない

仲間と出会い、男に抱かれ愛を知り、  
人の温かさを知ってしまった

今のリーザにとっでは…



うええっ

…えぐ…う

ザリ

ザリ

深夜二時

夜の刑が終わり

リーザは尋問室を後にした

傷だらけのリーザに手枷が嵌められる

二人の刑務官に引き立てられ、牢屋へと戻った

冷たく長い廊下と地下への階段を

リーザは裸で歩かされる

白い肌のあちこちから血が滲み

股からは白濁液が滴り

石の床に点々と小さな水たまりを作る

一日がかりの陵辱でポロポロになった裸体を

囚人たちが奇異の目で見つめていた



一番奥のリーザの独房に着いた  
格子の扉が開かれ  
牢屋の中へと入らされる

手枷を解かれたリーザは代わりに  
手足を張り付けられ、

大の字で冷たい壁面に固定される

独房の中ですら

リーザに体の自由はなかった

鉄格子が不快な音を立てて閉められる  
さらに施錠

刑務官の足音が遠ざかり、  
その後廊下の電灯が消灯される

窓すらないので周囲は暗黒となった

しかしここから数時間が

リーザに許された唯一の休息の時間であった

日の出とともに、また刑務官が迎えに来る

リーザは冷たい石壁と鎖に体を預け

深い眠りに落ちた

これが『奉仕刑』  
リーザの一日のサイクルであった  
朝5時から夕の6時まで昼の刑  
その後深夜2時まで夜の刑  
睡眠時間は3時間程である  
これを一ヶ月繰り返すのだ

食事は一日に2回で、正午と日没の時のみ

しかし正午は昼の刑の最中、  
晒し台での食事である

リーザに群がる人だかりを押し入って、  
簡素な昼食が運ばれてくるのだが  
これは目の前の男に懇願して  
口に運んで貰わなければならない



……

ん…

昼食には、男たちの精液や小便、  
ゴミなどが混ぜ込まれることが  
しばしばだったし、  
そもそも食べさせてもらえないことも  
少なくなかった

この日はスープに男たちの  
小便と精液が注がれた  
パンなどの他の全ての食事は  
踏みにじられ、捨てられる

悪臭漂う不味いスープを  
リーザは吐き気を堪えながら  
必死に飲み下していく



んぶぶ

…ぐぶつ

夕食は昼の刑が終わった後、  
夜の刑の前の数十分に振舞われた

こちらは普通の（質素な）食事で  
リーザの一日の栄養摂取に重要であったが、  
しかしその後の激しい拷問の責め苦し  
消化する前に嘔吐してしまうことも多かった



ん  
うぶ

んぶぶ

……

風呂やシャワーはなかった

リーザの体を清めるのは

昼に気まぐれにぶっかけられる冷水か、

よっぽど汚れがひどい時に

刑務官にかけてもらえる冷水だけだった

リーザの体は異臭を放ち、その事を罵る男たちの

声と負の感情が、さらにリーザを苦しめた

トイレもなかった

排泄物は基本的に垂れ流しである

陵辱の最中に排泄してしまうと汚物を

口に詰め込まれてしまうので、排泄は

深夜の、休眠の時間まで我慢していた

しかし足元から立ち込める臭気と

惨めな気持ちによつて

安眠することができず、

さらに精神をすり減らすこととなった

ん…

ふっ

グニッ



…ぐすっ

ギニ

おほ

ほおお

グニッ

ほおお



……

ほおおっ！

早朝から深夜、さらには就寝中まで  
リーザは体は傷付けられ  
精神をすり減らし続けている  
四六時中蹂躪されている尊厳  
一切与えられない休息…

このような極限状態での生活である  
常人ならば精神を壊すか、  
普通に命を落とす程の過酷な生活に  
リーザは耐えていた  
これはリーザの魔法、  
癒しの力のせいかもしれない

しかし当のリーザにとって  
それは不幸でしかなかった

あぎぎ…  
あつ

ガッガッ

あつ

ヒクワン

日々繰り返される陵辱と拷問  
罵声と嘲笑と、押し寄せる悪意の波

途中で力尽きていたとしたら  
どんなに幸福だったであろうか  
せめて精神が壊れてくれたら…

しかしリーザが普通の人間ではない  
魔女であるがゆえに  
リーザは生きていた  
内に秘められた魔力が回復力を高め  
付けられた傷を塞いだ

ズク

ザリッ

ジュジュ

かつてホルンで暮らしていた頃のリーザも  
人々の悪意の中で生きていた

魔力を持つホルンの人々は  
忌み嫌われ、疎んじられ、迫害の中にいた  
幼少期のリーザは、閉鎖された村の中で  
人の悪意から隠れ潜んで生きてた

そして今、美しく成長を遂げたリーザ  
その体はかつてのように、  
しかしかつてないほどの人の悪意に  
晒されている

轟惑的に突った魔女の肢体は、  
人に劣情ときいの感情を呼び起こし  
苛烈な激情を引き立てていった

時が経つと

その内リーザは心を閉ざした  
昔と同じように…

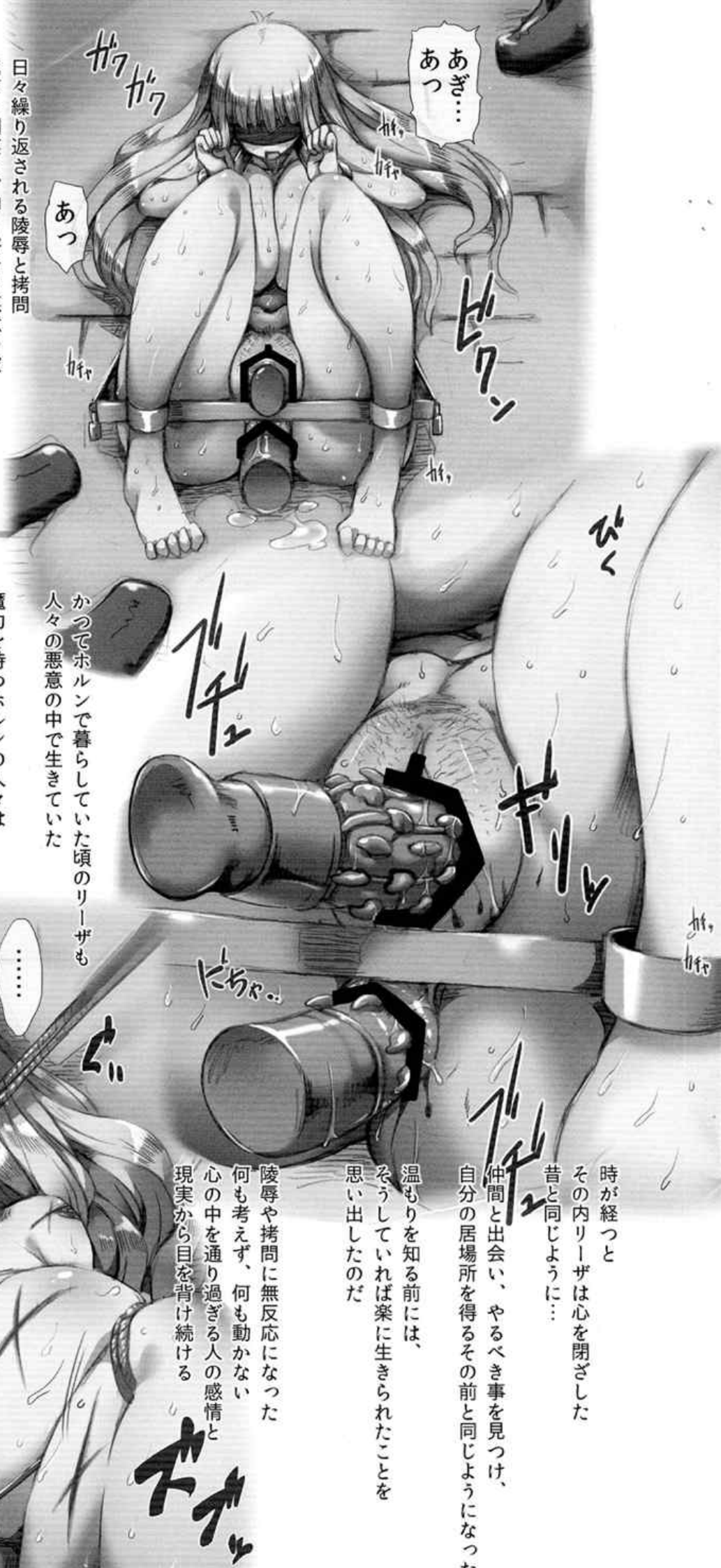
仲間と出会い、やるべき事を見つけ、  
自分の居場所を得るその前と同じようになった

温もりを知る前には、  
そうしていれば楽に生きられたことを  
思い出したのだ

陵辱や拷問に無反応になった  
何も考えず、何も動かない  
心の中を通り過ぎる人の感情と  
現実から目を背け続ける

ズク

ジュジュ



リーザが服役してから一ヶ月が経った命に関わる程の暴力に耐え続け、奉仕刑の最後の日

リーザはいよいよ明日、運命の日を迎える  
虚ろな目で男達に奉仕を続けるリーザは、そのことを理解しているのか、定かではない

最後の昼の勤め40人の奉仕を終えたリーザは体を洗われ、尋問室へと連れられた無感情に、いつもと同じ足取りのリーザしかし今日はいつもの夜の勤めとは違う様子だった

夕食が振舞われ、その後部屋に入る  
前日までリーザの体を虚めていた器具のほとんどは隅に片付けられており代わりに、部屋の中央にただ一つの物体のみがあった



部屋の中央、ぼやけた視界の中に映ったのは赤々と中身を燃やす火鉢と、そこに突き立てられた何本もの棒

刑務官の一人が物々しい手袋をして鉢から取り出した棒の先端は真つ赤に赤熱した鉄の板であったよく見ると所々溝が彫り込まれ何かの模様になっていた、よく見えなかった

明日運命の日を迎えるリーザに刑務所での最後の勤めが与えられる



リーザは床に仰向けに寝かせられ、両脇から刑務官に押さえつけられる両足は開いた状態で縛られ、膣の穴からは昼間注がれた精液がじわりと垂れてくる

鉄の棒を持った刑務官はリーザの体の上に立ったリーザはその棒が何なのか、これから自分が何をされるのか理解していたが、何をどうする気力はもうリーザにはなく、ただ自分の体に近づいてくるその赤い金属を不安と絶望を持って見守るしかなかった

あああああ



肉の焼ける音と強烈な臭いが  
部屋に一気に立ち込めた  
今まで無言だったリーザは  
絶叫し、暴れた  
刑務官2人がかりで  
リーザを押さえつける

鉄の棒は数十秒  
リーザの下腹部に  
押し当てられ続けた  
リーザは失禁し、  
膣内の精液を吹き散らした

その後鉄の棒が引き剥がされる  
焦げ付いたリーザの皮膚が棒にくっつき  
刑務官は少し勢いを込めて棒を  
リーザの腹から離した

あが  
あはあああツ

んかはっ



リーザの下腹部には  
消えることのない大きな印があった

最初の一本でリーザは気を失った  
その後大人しくなったリーザの腹部に  
順番に順番に、いくつかの棒が  
押し当てられていった

焼けた棒が当てられる度  
反射によってリーザの体がビクンと  
跳ね上がるが、その後は静かだった

リーザの体には  
ロマリア国旗を逆にした、『反逆者の印』と  
『犯罪者』の文句が一字ずつ刻まれた



焼印を刻まれたリーザはすぐに尋問室を出され  
牢屋へと運ばれていった  
この日の夜の勤めはこれで終わり  
気絶したままのリーザの四肢が壁に固定される

収容所での最後の夜、  
リーザは長く安らかな休息を取ることができた

日も既に昇り

午前9時

リーザの迎えがやってきた

リーザは刑務官に起こされ  
牢屋を後にする  
焼印の刻まれた腹部が  
ズキズキと痛むが  
体力は回復しており、  
しっかりとした足取りだ  
待合室のような場所へ連れられ、  
朝食を振舞われた  
乾いたパン二切れに、  
ラズベリーのジャムと牛乳であった



もそ

もそ

簡素だが、これでも  
リーザが収容所に来てからの  
食事の中では、一番のご馳走である

リーザはゆっくりと  
一口一口噛み締めながら食べた  
それに対して刑務官は  
何も言わずじっと見守っていた

それはリーザが食べる最期の食事であった



食事が終わるとリーザは  
収容所の外へと連れられた

正門を出て、いつも向かう兵舎とは別の方向だ  
リーザは訝しむこともなく、  
ただ大人しく付き従った



収容所の裏手、何かの作業場のような所へ来ると  
リーザは手枷を解かれた  
そして地面にうつ伏せになり、  
両手を広げるように、と指示される  
リーザはそれに従った  
大きな胸が体と地面に挟まれて変形する  
少し苦しかったが、我慢した

リーザの右手の先、数十cmのところに  
大きめの石材が置かれる  
左手の方も同様  
そして刑務官がふたりがかりで何か運んできた

それは長い木材のようである  
長さはおよそ1.6m  
幅20cm奥行き20cmの四角柱で  
中央部に四角い穴がくり抜かれている

それを先ほどの石材の上に置いた  
リーザの背面体の上に木の橋を架ける形である

木材の両端に楔を打ち付けると、  
それとリーザの両手首の手錠とを繋いだ  
リーザは手を大きく広げた形で木に縛り付けられた



その後リーザの体を起こした刑務官は、  
これが何かを説明し始めた

これは、リーザを磔に掛ける十字架の1辺だった

リーザの死刑を執行する刑場は  
ここから、ロマリア市街を挟んで反対側にある  
リーザはロマリア軍兵士の隊列とともに  
市街約5kmをこの十字架を背負って歩くのだ

贖罪の道を歩ききったその先の刑場で、  
十字架を組み立てられ  
リーザは一週間、十字架の上で  
その体を風雨に晒し続ける  
それから一週間後の正午、  
12時に銃殺刑が執行される

それがリーザに告げられた  
人生の最期の有様であった

く…  
うっ…



…ッ

リーザは自分の死に場所まで、  
自分の足で歩くことになった  
刑務官はリーザに、  
十字架を背負って立つことを命じる  
リーザは足に力を入れてみるも  
一向に立ち上がれなかった  
この巨大な木柱は重さ40キロ以上もある  
刑務官二人が木柱を両脇から支え、  
リーザを立ち上がらせる  
立ち上がったのを見ると刑務官は手を離し、  
リーザ一人で重量を支える

リーザはよろよろと歩き出した  
足腰を踏ん張り、  
一歩一歩足を交互に出していく  
バランスを崩して転倒すると、  
刑務官が木柱を支えてリーザを起こし、  
それからまた手を離れた  
リーザは歩き、  
転び、起こされ、歩いた



收容所から500m先のロマリア軍兵舎  
毎朝通ってきた場所だが、  
今日は一段と足取りも重い  
500m歩くのに30分も要した  
門の前にはリーザと共に市街を行軍する  
200人のロマリア兵たちの列があった  
リーザの位置は列の中央、  
100人と100人の間である  
自分自身を送る葬列に加わるべく  
よろよろと歩を進めるリーザを、  
かつてリーザを犯した兵士たちは  
嘲笑をもって迎えた

ロマリアの街を死のパレードが闊歩する

200人からなる厳かな灰色の軍服の列の中央に  
ふらつきながら歩く全裸の女の姿があった

『ホルンの魔女 リーザ』

ロマリアの仇敵、アークの一味である少女は

ロマリア軍に屈服したと、

市民に大々的に喧伝された

その丸出しの下腹部には、

ロマリアのシンボルが刻まれている

列の歩みは、リーザに合わせており極めて遅い

リーザが転ぶたびに静止し、

立ち上がらせ、また歩き出すのを待った



はあ…

は…

あ…



ロマリア市街には事前に  
ホルンの魔女を処刑するという旨の  
ビラが撒かれていたが  
通りに人はまばらで、閑散としている  
魔女に対して石を投げる民衆などは  
全くいなかった

市民はロマリア軍によって  
駆り立てられる全裸の少女を  
哀れみの念を持って、  
家の窓から眺めるのみである



リーザは5kmの道のりを6時間かけて歩ききった。昼前に収容所を歩き出して、刑場に到着した頃には日没間近であった。当のリーザは疲労困憊。体中擦り傷だらけで額と鼻からも出血していた。膝をつき、うずくまるリーザを4人の兵士が持ち上げる。

場となる荒野には計7本の木柱が立てられている。高さはそれぞれ約3m。どれも柱のてっぺんに出っ張りがあり、罪人が背負ってきた木柱の中央の穴にびったり収まるようになっていて、7本の内、中央付近にある一本がリーザの墓に選ばれた。

2脚の脚立を使い、リーザの木柱をリーザごと3m持ち上げる。棒の出っ張りを木柱の穴に差し込むと十字架は完成した。



リーザは両肩にかかる強烈な力に少しうめき声をあげた。足枷の鎖は杭の後ろ手に回され、リーザは足を自由にできないが、体重を支えるものではなく、基本的に宙吊りの状態だ。

隊長らしき兵士がリーザに向かって何か読み上げた後、200人の兵士たちは引き上げていった。日も暮れ寒風が吹き付ける荒野に、リーザは一人残された。



通常、磔にされた者は一週間と持たず絶命する  
飢えと渇き、

それに体が宙吊りの負担に耐えられない  
リーザはいつまで持つだろうか？

1日目

街から見物人が数人やってきた

しかし刑場は柵で囲われているため

リーザのそばまで寄ってくるものはない

柵は低いものだったが、ロマリア軍の戒めを破り、  
柵を乗り越えるロマリア市民は存在しない



リーザは晒された恥部への視線と、  
自らの重力にひたすら耐えている



2日目

午後から雨が降る

雨はリーザの体の汚れをいくらか落とし、  
リーザの渇きを癒してくれた

3日目

気温が低く風も強い日

頭上から鳥の声が聞こえるが

リーザは首をもたげる元気もないので  
地面に映る影を見ていた

4日目

日差しが強い

リーザの垂らした排泄物に寄ってきた羽虫が体を這い回っている  
くすぐったくて少し身じろぎした



5日目

朝から豪雨

体に叩きつけられる大雨粒が体の痒みをとってくれたが冷え込みが尋常ではない

リーザの体力が尽きようとしていた

6日目

曇り

冷たい風が荒野を吹き抜けていく

市民が何人かリーザを見に来た  
リーザは首を垂らしたまま身動きもしない  
声を掛けるものもいたが何の反応もない  
死んだのだろうか...



7日目

正午に

敵かな軍服に外套をまとった

将校風の軍人とそのお付、

そしてライフルを携えた兵士6人が

刑場へとやってきた

兵士たちが木柱にくくりつけられた人の形をした汚い物体を一瞥する  
それはピクリとも動かない

兵士の一人が十字架のもとへ近寄り  
雑巾のように真っ黒に汚れた  
リーザの体に触れた



リーザ・フローラ・メルノ  
ホルンの魔女  
ロマリア市郊外の処刑場にて  
死刑執行——死亡



ホルンの魔女つかまえた

A WITCH OF HORN WAS CAUGHT



リーザの心の奥底から  
遠い過去のように思える記憶が浮かんでくる

キメラ研究所：

私を：ホルンのみんなを不幸にした：

みんなキメラに連れて行かれて、居なくなった

私たちと同じように

世界中で沢山の人々を不幸にしていると知った：

私の戦い

私のやるべきこと：私にできること

それはキメラ研究所をなくすこと

私はアークに出会い、アークの戦いを知った：

『君は実に素晴らしいね』

究極のモンスターの素材としてピッタリだ

君の体内に眠る、

強大な生命力とも言える癒しの力

さぞかしタフなモンスターが生まれることだろう

それに魔物と心を通わし操るホルンの魔女の力：

モンスター共を束ねる統率者を作れるかもしれないね』

私は：

私はキメラ研究所を無くすために

今まで頑張ってきたのに：

最後は私自身がキメラ研究所で

モンスターになるだなんて：

リーザは抵抗しようにも指一本動かせない

絶望感に包まれたが涙も流すことができなかった

『さつそく君を最高のモンスターへ：  
と言いたいが問題があつてね』

『ここはだいたい初期に建てられたプラントで  
設備も大したもの揃つてない  
人間を改造してモンスター化する機械もだ  
最新鋭の設備を備えたプラントはみんな  
アークに破壊されてしまつたのだよ』

…？

『そこで非常に原始的な方法を取らざるを得ない  
すなわちモンスターと人間の交配』

つまり、君がモンスターの子を孕み、出産するのだ』

私がモンスターと：

『もちろんこの設備で君のお産をサポートするよ  
胎児には成長促進剤を断続的に与えるから  
人間の赤子よりずっと早く成長する』

君が十月十日もうんうん苦しむことはない  
ま、精々3ヶ月くらいかな？

成長スピードや陣痛の時期も調節するので  
体に負担の少ない、理想的な出産を設定できる』



『それに考えようによつちや  
君がモンスターになるよりも  
ずっと建設的かも知れないよ』

君一人が強力なモンスターになるよりも、  
君の血を引いたモンスターを作り、それを成長させて

親としてさらに子を産ませれば、  
強力なモンスターの大家族を作れるじゃないか？

もしくは生まれた子と君自身が交配して、  
さらに濃い血統のモンスターを作るのもいいかも：

おつとそれじゃ君の負担が重すぎるかな？

でも君はセックスが好きらしいし、案外ハマるかも』

研究員は喜々として狂気じみたことをしゃべり続けた

リーザは話の半分も理解できなかったが、  
絶望とは別の感情が、心に生まれているのを感じた

それが何なのか、まだこの時は  
リーザにはわからなかつたが：

『：長話に疲れてしまつたようだね  
ゆつくりおやすみ、リーザ』

次に起きた時には君の『夫』を紹介しようか』

それから3週間後、  
リーザはベッドから起き上がり、  
物に掴まって歩ける程度に回復していた  
とはいえリーザが歩くことが出来るのは  
閉ざされた病室の中のみである



リーザには服が与えられず、  
引き続き裸で過ごしていた  
暖房が効いており、肌寒さを感じる事はない  
ベッドは金属のテーブルで毛布すらなかったが  
内部に何か機械が埋め込まれているのか、  
横たわるとぼかばか温かい

部屋の隅には監視カメラがあり、  
常にリーザのあらゆる姿を追っていたが  
そのことにはもうリーザは何も感じなかった

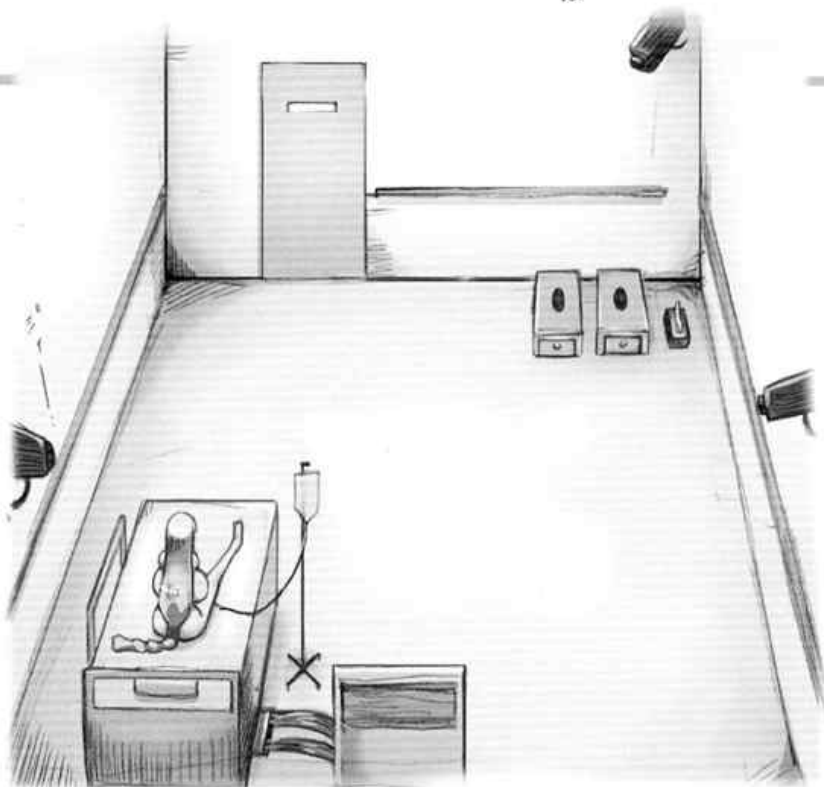
ただ一ヶ月以上も放つたらかして  
伸びきったムダ毛の処理を禁じられているのは  
少しだけ気になった  
曰く、野生であるモンスターと  
交配するにあたって  
人間のそのままの姿の方が良いとのこと...  
もちろん刃物による逃亡や  
自殺防止の理由もある  
当のリーザにそんなつもりなど無いのだが...

一日一回、研究員が熱いタオルで  
全身を拭いてくれるのだが  
豊かに生い茂った恥部や脇の下を晒すのは  
流石に恥ずかしかった

食事は一日3食、栄養バランスの整ったものに加え  
点滴による栄養補給もある

部屋の隅には穴の空いた箱が二つ置かれており、  
そこがリーザのトイレである  
小便を入れる用と、大便を入れる用  
一日一回、検体として回収されていた

体の全てを管理される生活  
新たな牢獄とも言える場所だが、  
リーザの心情は穏やかで  
むしろ心地良さをすら感じていた





……

食事は与えられるし、暴力を振るわれることもない  
逆に体を労られる状態だ

先の収容所での生活とは比べるべくもない

そしてリーザを世話する研究員たち

それこそがリーザにとって、収容所生活と

最も異なる点だった

リーザは彼らの感情を読み取ると、

長らく忘れていた感覚を思い出した

彼らの心情は、リーザの体への

『好奇心』、『労わり』、『愛情』で溢れていた

しかしそれはゆがんだ愛情である  
大事なモルモットを、万全の状態で

実験に使うという類の…

リーザはそれを理解していた

自分はカメラの材料としか見られていないと…

理性では理解している

このカメラ研究所の忌むべき実情を

それがリーザに降りかかり、

やがてリーザと、さらに大勢の人々に

破滅をもたらす事になる

それに抵抗する意思はある

しかし先の凌辱地獄で  
鬪られ尽くされたリーザの心は  
疲弊しきっていた

ひび割れたリーザの精神…

研究員の偽りの愛上は

妙薬のように効いてしまった

さらに全身に及ぶ怪我の治療のために、

エネルギーが脳に回らない

薬の副作用もあって、頭は常に

かすみ掛り、ボーっとしている

正常な思考ができない

使命を持って戦ったリーザの強い意志を

取り戻せないでいた

リーザは徐々に、無意識下では

カメラの母胎となることを受け入れ始める

歪んだ愛情によって修復されたリーザの心は、

歪みつつあった

リーザの治療が続けられている。体はほぼ回復したと聞いていい程だが、リーザの意識にはもやがかかっているような、ぼんやりとした感覚と体のだるさが残っていた。それには研究員の意図した理由があった。

治療を受け始めて一週間、今からは二週間前のことである。

リーザはみるみる回復しつつあり、ベッドの上で体を起こし、夕食として出されたスープを飲んでいる。

傍らには研究員がおり、リーザの体へとコードを伸ばすものものしい機械の点検をしている。

研究員は、よく喋った。

興味なさげにスープを吐息で冷ましているリーザを尻目に、装置や表示されているデータの説明をしている。良くわからない専門用語を混ぜ込みながら機械を一つ一つ弄っていた。

リーザは話を全く聞いていなかったが、そのうち研究員はリーザの体のことを喋り始める。

リーザは顔を上げた。



曰く

『君の体について調べさせてもらったよ。まずは君の体内の癒しの力。君自身の回復力を支えているだけでなく、集中すれば他人にも効果を与える事ができるようだね…』

魔力はだいたい子宮の下の方に溜まっていて君の腔に挿入した男性からは「何度射精しても萎えない、名器」と評判だったそうだね』

リーザは顔を真っ赤にして俯いた。

『しかしながらそれに関連して悪い一面もある。君は何年にもわたって男たちと性交渉を繰り返して、腔内射精されているにも関わらず一度たりとも妊娠を経験していない。』

月経も周期的に來ているし、不妊症というわけでもない。もちろん男性諸君がみんな機能障害だったわけでもあるまい、一体何故なのか』

『思うにそれは君の子宮付近の癒しの力のせいだ。その魔力が君の卵巣にも作用し、排卵された卵子を魔力が「膜」のような形で覆ってしまうのだ。注入された精子が卵子にたどり着いたとしても、一般的な人間の精子の体当たりでは、卵子を覆う再生力の壁を突破できないのだ』

『君を妊娠させるには、その癒しの力を何とかしなければならぬ』

そこで君がある程度回復したのを見計らって、君の魔力を一時的に消散させる薬剤を投与する子宮の下付近に、こう、ぶすつと注射するのだ。一日2回朝と夜、1週間ほど投与する。その頃にちょうど排卵がなされるように調整してあるからね』

『癒しの魔力を失ったら、君の膣はそんなに名器じゃなくなってしまうかもしれないが、まあ相手はモンスターだから別に気にしないだろう』

君も体の変化を感じるかもしれない。今まで働いてたものが、だんだん働かなくなる感覚だ。あまり気持ちの良いものではないかもしれないが、どうか我慢して欲しい。

まあ一時的なものだからね。じきに元通りになるはずだ。精子を着床した後にな』

そして今から1週間前、魔力消散薬の投与が開始された。

リーザの下腹部、真白い肌に茶色く焼き付いた反逆者の印、その三角形の下端へと、一日二回注射針が突き立てられた。

それから、リーザはあからさまに体が鈍くなるのを感じた。1週間前には今とだいたい同じ程度まで回復していたのだが、その後ほとんど体の回復は進んでいない。

体を動かすのがおっくうになり、一日のほとんどをベッドで寝て過ごすようになった。意識はぼんやりして、物を深く考えることができない。しかし全身のだるさに反して、ある一部分だけは熱を持っていた。

『ついでに薬剤には排卵誘発剤と少量の催淫薬を混ぜてあるからね。旦那さんと熱い夜をすごせるようにね...』

リーザの股の間には膣からの分泌液によって小さな水溜りが形成されていた。

それでいてリーザは手や全身を激しく動かすことができず、自慰をして発散することもできない。耐え難い性衝動に、リーザは悶々とした日々を送っている。ある日、世話をしに来た若い研究員一人に、小声で、自分を犯してくれるようこっそり耳打ちしたこともあったが、聞き入れられなかった。

注射された部分、子宮とその下の膣がじんわりと火照っている。それは激しい衝動でなく、じわじわ蝕むような感覚だったが、確実にリーザの下半身を汚染していた。

まだ見ぬモンスターの夫との情事を恋焦がれるまでになっていた。



薬剤投与から一週間  
この日、投与最終日であると共に  
リーザの新婚初夜でもあった

研究員がリーザの病室へとやってきた  
研究員はリーザの体と接続された  
モニターの数字を見て、  
心底愉快そうに何か分からないことをしゃべっている  
リーザの子宮へと最後の薬剤が注射される  
これからモンスタールと結婚させられ、  
子を孕まされるというのに  
リーザの内心は何故か穏やかであった

続けて入ってきた若い研究員二人を加え、  
三人がかりでリーザの初夜への準備が進められる  
何種類かの錠剤が渡されリーザはそれを飲む  
リーザを確実に孕ますための薬剤なのだが、  
一粒一粒いちいち研究員の説明が入る  
リーザは全く頭に入れなかった



濡れタオルで全身の汚れを落とす  
その後人間の匂いを消し、  
夫と同じモンスタールの体臭を得るよう  
エキスが全身に塗りこまれる  
とりわけ強烈なメスのフェロモンが  
陰部や腋の毛に塗られた

膣内も同様に、洗浄しモンスタールのエキスが塗られる  
モンスタールの巨大な肉棒に  
体を裂かれぬような特殊な軟膏も塗られた  
癒しの力のない今のリーザは、  
ただの人間の少女も同然である  
また激しい痛みを伴う陵辱になるかもしれない  
だが、リーザには不安は感じられなかった

すべての準備が完了し、  
リーザはモンスタールのメスとなった  
リーザはベッドから起こされ、  
部屋の外へと誘われた  
研究者たちに伴われ、  
リーザはバージンロードを歩き出した



病室を出て長い廊下を歩く  
金属の壁にこつこつという靴音と、  
べたべたと裸足の足音が響く  
突き当たりのエレベーターで地下に降りる

扉が開き、エレベーターが密室になると  
間もなく室内はリーザの放つフェロモンで満たされる  
若い研究者の一人が内心興奮しているのが  
リーザには伝わってきた  
リーザは彼に妖艶に微笑みかける

地下には薄暗い廊下と  
無数の檻からなるフロアが広がっていた  
モンスターの飼育エリアだった

長い廊下を新婦はよたよたと歩いていく  
檻の前を通るたびにリーザの元へと  
モンスターが駆け寄ってきた  
リーザのフェロモンに反応しているようで  
鼻息荒く、勃起を檻の外へ突き出す個体もあった

『こいつらは雑魚さ  
君と交配する資格はない  
安売り品なんだがなかなか売れなくてね』

辛辣なコメントの研究者だが  
リーザには自分の体へと向けられた  
モンスターたちの感情が心地よい  
ここにいるモンスター全員と  
交尾して回りたいと思った

檻のエリアを抜けると、個室のエリアがある  
一室一室嚴重な扉で閉ざされ、  
中に何がいるのか伺い知れない

やがてそのうちの一室のドアの前に立たされた  
カードキーによって施錠された扉を開く  
薄暗い部屋の奥で、リーザの夫は待っていた

グルルル…

オオオ

…

『レッサーデーモン種、  
マッドストーカーだね  
この個体は体長244cm  
体重306kg  
ブラキアの山岳地帯で捕獲した成体と  
人間の牝とを交配させ  
生まれた個体だ  
促進剤で成体にしたので  
まだ3歳かそこらだが、成体だ  
まあ人間で言うところ20代前半くらいかな』

『血気盛んな若者で性欲も旺盛、  
君とはお似合いのカップルじゃないかな  
でも人間に慣れているので  
君に危害を加えることはないと思うよ  
もっともあの巨体だから、  
並の人間の女性では交尾に耐えられないかな  
でも君なら大丈夫、きっと上手くやっつけていけるよ』

研究員はひたすらしゃべり続ける  
リーザは研究員は無視し、  
夫となるモンスターを見つめた

2mをゆうに越す巨体  
角と牙の生えた恐ろしい顔面、  
肉のついたまんまるなシルエツトだが、  
それが分厚い筋肉であることはわかる  
凶暴な外見の、まさにモンスターといった風貌だが  
今は部屋の隅に座って大人しくしている  
モンスターも、妻となるリーザを  
静かに見つめていた



……  
グルル……

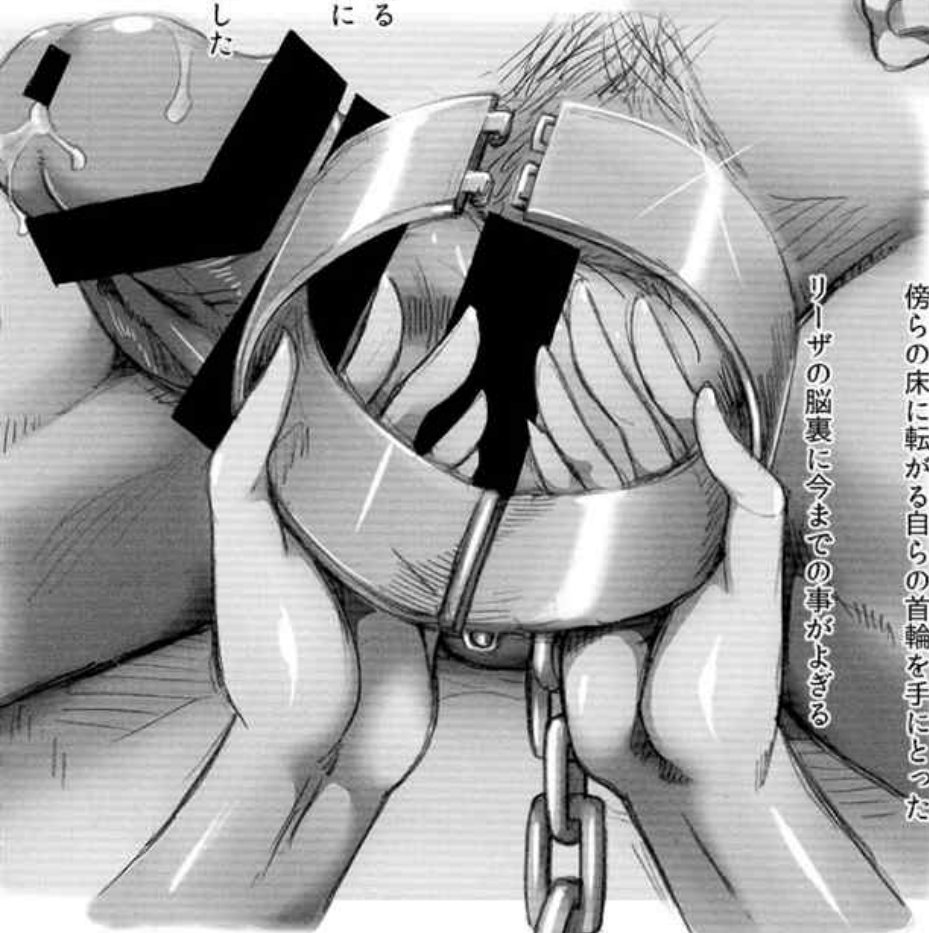


リーザはモンスターの、二つの部分に目がいった  
一つは、大きな男性器  
微動だにしないモンスターだが、  
唯一その肉棒が完全に勃起し  
血管を浮き立たせビクンビクン脈打っている  
形状は人間のものに近いが、  
その大きさはリーザの太ももほどもある

もう一つは、モンスターの左腕  
左手首に金属の腕輪が嵌められており、  
それは巨大な腕のサイズに合わせて  
巨大な輪となっている  
そこから伸びる一本の鎖、長さは1mほど  
曲がりくねった鎖の先に、  
やはり金属製の輪が繋がれていた  
こちらは口が閉じられていない、開いた輪だ

形状だけで言うと手錠のようである  
だが鎖の先のもう一つの輪は、  
片方に比べて明らかにサイズが小さい  
直径が15cmほど幅も3・4cmである  
フリーになっているモンスターの右手首に  
収まるサイズではなかった

リーザはその不思議な手錠の意味を理解した



これは、手錠ではない、指輪だ  
結婚指輪

ただし嵌めるのは指ではなく、首  
夫・モンスターの左腕と、  
妻・リーザの首を結ぶエンゲージリングだった

『リーザ』

研究員の声が聞こえた

『分かっているね？  
その首輪を嵌める』

リーザは夫へと歩み寄り  
傍らの床に転がる自らの首輪を手にとった

リーザの脳裏に今までの事がよぎる



男達に抱かれる私  
体売って、お金を稼ぐ  
お金はシルバーノア、アークへと  
アークはキメラ研究所を破壊する

これが私の戦い  
私に出来ること  
やるべきこと

私はロマリアに囚われ  
陵辱を受ける

心も体も翫られ、踏みにじられ：  
それでもアークの秘密を喋らなかつた

私の戦いがここで終わっても  
アークは戦い続ける

それでいい

いつの日か、キメラ研究所が滅び  
世界がロマリアから救われるなら

私の全ては、キメラをー

…  
何…だったっけ？  
たしか、あれ？？  
私は、えつと……？？？

リーザの頭はそこで止まった  
疲弊しきつた心は  
思考能力の限界に達し、  
理性が戻るのを邪魔した

むずかしいことを考え、  
頭が疲れてしまった  
リーザだが

ある一つの事は  
思い出すことができた  
それは性の悦びだった

男たちとのセックス  
お互いの心を重ね、  
感情を共有し、

本能をぶつけ合い

たつぷりの愛情を精液という形で  
子宮に受け取ること

それがどんなに  
気持ち良かったかを思い出した

何かのためにセックスしていたんじゃない  
私はセックスするためにセックスしていたんだ

リーザはそう思った

ガチンツ★



ジャラ

『リーザ、どうした？  
早くしたまえよ』

研究員の言葉で  
ハッと我に帰ったリーザ  
手に持っていた金属の輪を  
ためらいなく自らの首にかけた

リーザはこうして  
モンスターと結ばれ、キメラとなった

夫の感情が伝わって来る  
その感情は、『愛情』

リーザはその巨大な愛情を全て受け止めるべく  
心と体を開いた

『…やさしくしてくださいね、あなた』



研究員たちは  
部屋の監視カメラの調子をチェックすると

ふたりを残し、部屋を後にした  
ドアがロックされ、部屋は密室となる  
エレベーターで地上へと戻り  
その後モニター室へ

リーザの部屋のモニターを確認すると、  
すでに交尾が開始されていた

リーザは体を持ち上げられ  
モニターの巨大な男根の上に乗せられていた  
夫に体ごと掴まれ、強引に男根を出し入れされる  
首輪を引かれ、体が弓なりになる  
大きな指の隙間から溢れでた大きな乳房が  
上下に激しく暴れている

別のカメラに切り替えると  
その結合部がよく観察できた

リーザの太もも程度の大きさの男根は、  
リーザの膣に半分程度収まっている  
リーザの下腹部がこもこ盛り上がっていて、  
男根が子宮に侵入し、  
内部を圧迫していることが分かる

んおお!

おほおッ

しかし当のリーザは、苦しげながらも  
明らかな恍惚の表情を見せていた  
限界まで広げられた膣から大量の分泌液が溢れ  
巨大なピストンの動きをスムーズなものにしていた  
研究員はその初夜の様子に大興奮である  
モニターに向かって何かばちやくちや喋って、  
何かひたすらメモを取っている  
ほかの若い研究員は  
別の何かをもよおしている様子で、  
暫くするとお手洗いに行ってしまった



そうこうしている内にリーザに  
最初の射精が与えられる  
リーザとモンスターは共に吠え、  
次の瞬間リーザの腹がぼこっと膨らんだ  
同時に白濁液が結合部の隙間から漏れる

**コホッ**

ふたりが数分間余韻を楽しんだあと、  
リーザの体が引き抜かれ  
広がりきった膣口から大量の精液が零れだした  
金属の床の上は、白濁の海が形成されていた

**コホッ**



はあー…

**トホッ**

はあー…♡

んへへ♡

妻の挑発に夫もやる気をあらわにした様子で  
すぐさま猛烈なピストンを開始した

しかし1時間後、  
相変わらず上を向いたままの肉棒に  
リーザが自ら跨った  
足を宙に浮かせ、自分の体重で  
巨大な怒張を膣内に収めていく

その後すぐに二回戦が始まる、ということではなく  
しばらく二人でお互いの体を舐め合っていた  
モンスターの方も  
リーザの体を気遣っているのだろうか



他愛もない雑談を展開する研究員たち  
その先の画面の中で嬌声を上げるリーザ

この日6回目の性交と膣内射精を受ける  
モンスターである夫の精根は枯れることはなく  
粘り気のある濃い子種が供給されている  
そしてその獣欲にリーザは  
完全に順応し、支配されている

本能のまま、体力の続く限り  
交尾に興じる少女の姿は  
もはや人間のものではない

んはあああつ♡

あつ♡

んああああ♡

グウウ…!!

そしてリーザの体内では、  
いよいよ少女を『母』へと変える出来事が  
起こりつつあった



ふー…

ふー…

2週間後

扉が解放され、モンスターの元からリーザが搬出される  
部屋内に催眠ガスが注入され  
夫婦を昏倒させ、その隙に引き離す

同日、着床を確認

リーザは次のセクションへと移された

浴室では、マスクをした研究員が数人がかりで、  
長い髪の毛の中まで  
精液で塗り固まっていたリーザを入念に洗浄する

むせ返る獣臭と精液の臭いを放つ

リーザの肉体を相手に奮闘

2時間以上かけてリーザは綺麗な体を取り戻した

その後意識を取り戻すリーザ

栄養補給の後、

研究員たちはリーザをとある部屋へと連れ立った

狭い部屋の中に機会がびっしりと並び、

中央には背もたれ付きのイスらしき金属の物体が

鎮座している

リーザはその器具の上で

出産までの3ヶ月間をこの部屋で過ごす

リーザは中央の椅子に座らされ、

様々な器具を体に装着された

まず両手両足が動かないようにベルトで拘束される

手首、二の腕、足首、太ももなどに

電気ケーブル付きのテープが巻かれる

下腹部にもケーブル付きテープ  
ケーブルは周りの様々な機械へとつながっている

点滴針、右腕と下腹部に刺される

栄養剤および促進剤が断続的に注入される

3つの突起物のついた貞操帯を股間に装着

1つ目は尿道へと挿入、

カテーテルが接続され尿を吸出する

3つ目は肛門へ挿入、

大便を吸出するチューブが接続される

間の2つ目は膣へ挿入、

これはただのデイルドだが、

機器がリーザの性欲を検知すると適度に振動し、

性欲を発散させる

ケーブル付きの小さな首輪を装着

様々な体内情報を監査する他、

脳からの体への不必要な電気信号をカットし

首から下を自由に動けなくする

鼻と口を覆う酸素吸引器

酸素供給のチューブとは別の

太いチューブが中央を貫いている

これを喉奥まで挿入し、

井の中に栄養となる

流動物を流し込む

最後に、頭、目、耳を

すっぽり覆う大きなヘルメット

リーザを外界からの情報から隔絶すると同時に、

脳に特殊な電気信号と催眠音波を送り

リーザを常に『眠って夢を見ている状態』にする

『そうそう、これを忘れるとこだった』

視界のきかないリーザだが  
ふいに胸の先端付近に刺激を感じ取った

リーザの大きな乳輪を覆う搾乳器

『そのうち母乳が出るようになるからね』

『君のお腹にいたのはモンスターだ

人間の胎児ではない

母体の安全と胎児の成育を両立するためには

こんな物々しい装置が必要なのさ

でも大丈夫、君は寝ているだけでいい

我々が君とお子さんの全てを管理するからね

目覚める時には元気な赤ちゃんのご対面さ』

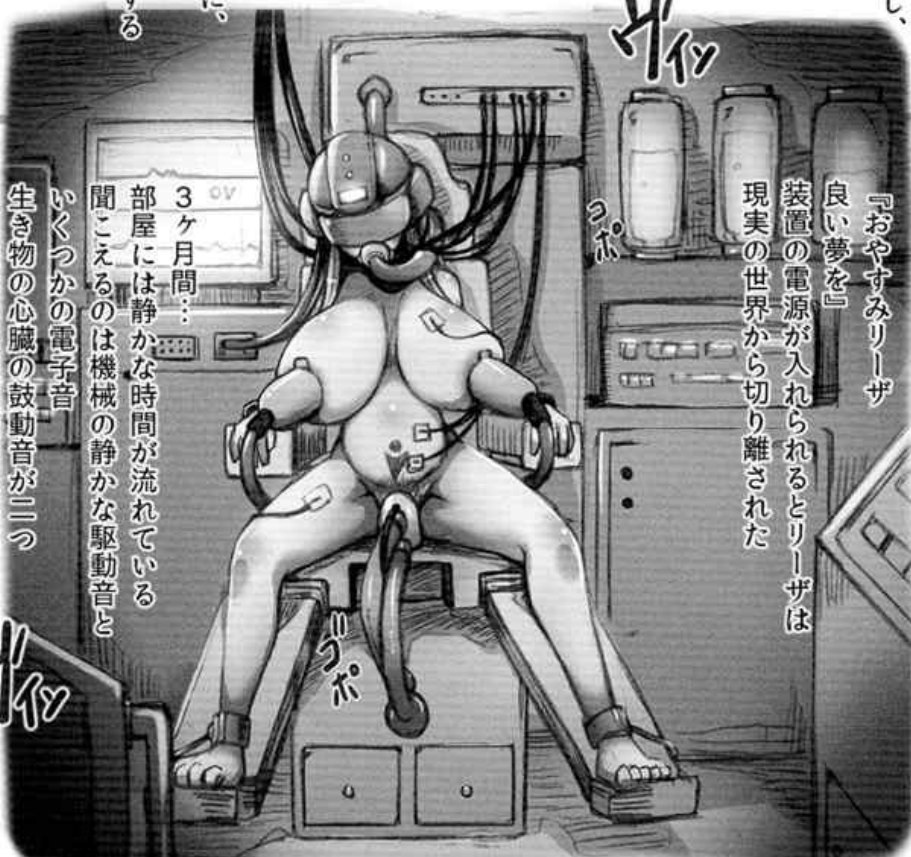
『おやすみリーザ

良い夢を』

装置の電源が入られるとリーザは

現実の世界から切り離された

3ヶ月間：  
部屋には静かな時間が流れている  
聞こえるのは機械の静かな駆動音と  
いくつかの電子音  
生き物の心臓の鼓動音が二つ





『おはようリーザ  
良い夢は見れたかな』

『見えるかい？自分の身体が  
実に美しく成長したね  
お腹の子も理想的に育っているよ』

『薬を投与したから  
もうすぐ陣痛が始まるよ  
元気な赤ん坊を産んでおくれ』



三ヶ月後ー  
目覚めたリーザは  
金属のベッドに寝かされ、  
大勢の研究員の視線の中にいた  
その体はもはや少女と呼べるものではなく  
キメラの母として完成された肉体となっていた

ドクン!

麻酔が切れ、徐々に下半身が  
痛みに包まれてくる  
初めての出産：しかも  
モンスターの子供を産むリーザ  
しかし不思議と不安や恐怖はなかった  
今までのこと：キメラ：モンスター：  
そんなことは今のリーザにとっては  
どうでもいいことだった

ドクン!

意識はあるものの、薬剤の影響で  
体は動かせないし、声も出ない

しかし子宮と膣だけは、  
育ちきった退治を排出するべく  
活発に脈動していた

破水が起こる  
いよいよリーザが、真に  
人間でなくなる瞬間がやってきた

ドクン!

ヒクヒク  
しゅん...んく



ああ!  
あああ

はああ!

多数の研究員が見守る中  
リーザは4時間にわたる格闘の末  
初めての出産を遂行した

リーザには生まれた我が子を  
抱く暇も与えられずに  
『次なる夫』の子を宿すための  
治療と肉體改造が開始された  
再び病室のベッドに横たえられたリーザに  
様々な薬が大量に投与される  
出産による体のダメージを  
いち早く回復させるため、  
癒しの力を増幅させる

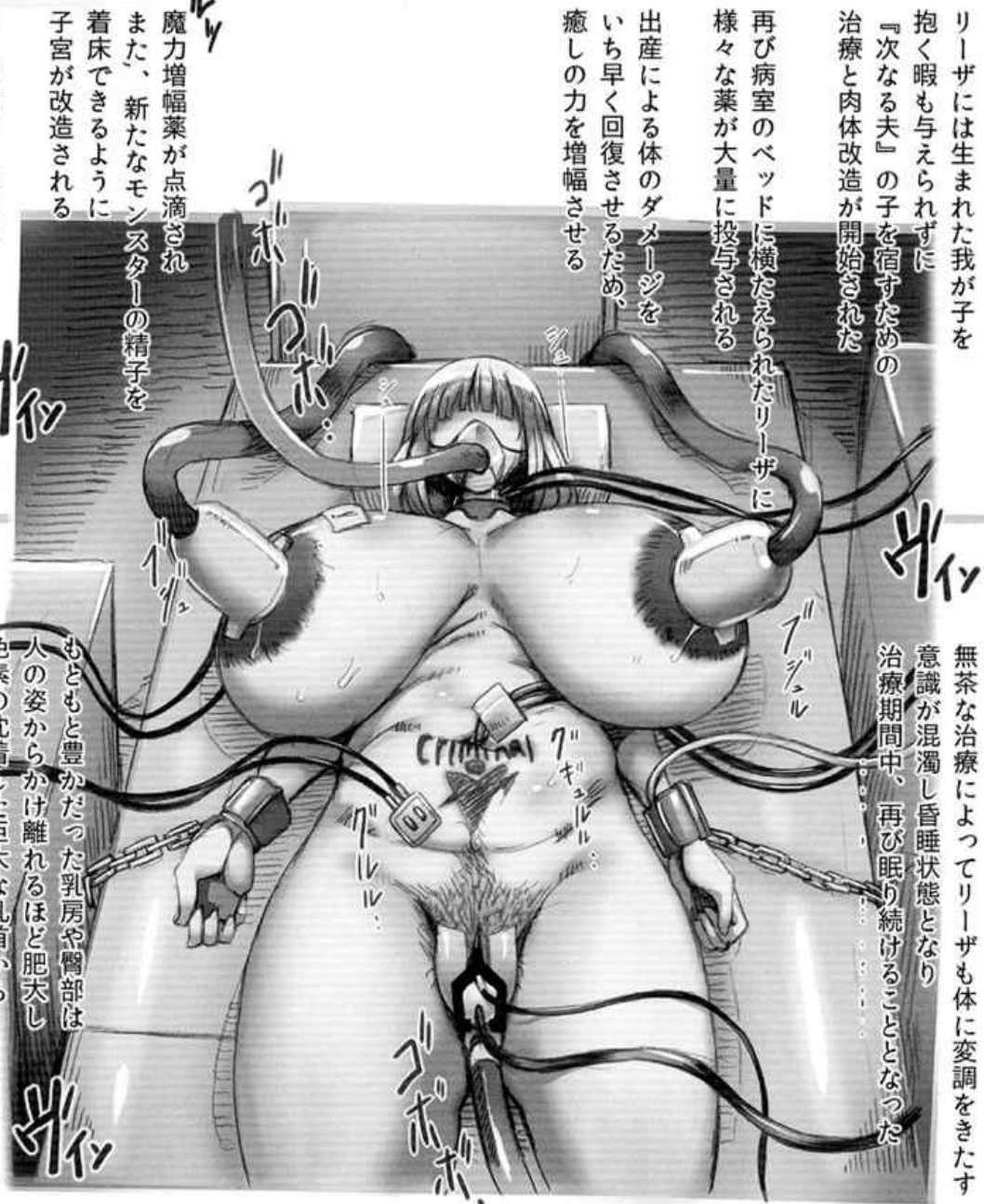
生まれてきた赤子は

大きき魔力を宿していることが分かり

研究員たちは歓喜に包まれている

出産を終えたリーザは硬いベッドの上で  
体を伸び切らして失神している

魔力増幅薬が点滴され  
また、新たなモンスターの精子を  
着床できるように  
子宮が改造される  
それが済むと今度は  
魔力消散薬が投与され  
受精を可能とする体へと  
再び肉體改造改造  
スケジュールに合わせて排卵するよう  
生理も投薬でコントロールされる



無茶な治療によってリーザも体に変調をきたす  
意識が混濁し昏睡状態となり  
治療期間中、再び眠り続けることとなった

もともと豊かだった乳房や臀部は  
人の姿からかけ離れるほど肥大し  
色素の沈着した巨大な乳首から  
絶えず母乳を染み出させている  
脳細胞も劣化し、人らしい思考が出来なくなり  
言葉すらも忘れていく

リーザは生まれ変わっていった  
これからリーザはカメラの母として  
様々なモンスターと交配し、  
子を孕み、産んでいくことになる



あはっ♡  
んおあああ♡

第2の夫  
コボルト種、ウェアウルフ  
ウェアウルフは妻を自分の所有物とし  
その証としてリーザの体のいたるところに  
爪と牙で印を刻まれた  
体を傷つけられても、  
当のリーザは夫の愛情を理解し  
幸せそうである

2週間の交配期間を経て妊娠  
3ヶ月後出産



おっ…ええ  
おぼ

第3の夫  
スライム種 ダークスライム  
通常の妊娠と異なり  
リーザの子宮内にて増殖を行ったようである  
口腔、肛門などあらゆる穴に粘液が入り込み  
体内で暴れる感覚にリーザは苦悶の悦びを見出す  
3ヶ月のうちに26匹ほどの幼体を出産



第6の夫  
オーク種 ホブゴブリン  
交尾の際は主にリーザが主導権を握り  
子種を搾り取ったようである

妊娠、3ヶ月後出産  
生まれた赤子は  
元気な三つ子であった



第9の夫  
レッサーデーモン種 マッドストーカー  
2年前に生まれた、リーザの実子  
培養槽で成体にしたもの  
2週間に渡る母子の営みは  
とりわけ深い情愛に包まれていたようである  
3ヶ月後出産



そこには人間の少女から  
モンスターへと改造されたリーザの姿があった  
しかしリーザはもう自らの不幸を嘆くことはない  
頑なに守ってきた信念を思い出すこともない

人ではなくなったリーザにとって  
モンスターとして愛され、  
寝ている時以外はセックスしている今の人生は、  
幸せだった



あっは♡  
あっははあ〜…

リーザはキメラの母としての勤めを  
十二分に果たした  
数々の夫と愛し合い  
数々の子を産んだ

ホルンの魔女つかまえた

A WITCH OF HORN WAS CAUGHT

ビッ

ビッ

——

ッ

——

ッ

—緊急警報  
—緊急警報  
—侵入者あり  
職員は直ちに—

何処か遠くで  
けたたましい音が鳴り響いているようだ

ビッ

——

ッ





「見つけたのか？」

「ああ、ようやくだ。  
モンスター共は？」

「全部片付いた。  
30分後に爆撃が始まる  
急ごう」

「おそろしくこれが最後のプラントだろう  
これでモンスターの供給も途絶えるはずだ」

「ああ、……しかし……」



「……ひどいな  
生きてはいるようだが、  
この体ではもう……」

「……いや。  
クケルのところへ連れて行こう  
彼女自身の回復力もあるしね  
きつと元通りに回復する  
傷跡も消えるぞ」

「リーザ  
迎えに来たよ」



『ホルンの魔女つかまえた』  
ヤルキ事情がわる

ホルンの魔女つかまえた  
A Witch Of Horn Was Caught

発行日：2014・12・30

発行元：GREAT芥

著者：tokyo

HP：<http://acta.sblo.jp/>

twitter：Yurukage

印刷：おこのしっほ様

※18歳未満の閲覧を禁止